

科目区分 芸術文化課程専門教育科目（選択必修）
 科目名 音楽文化論
 タイトル 24年度内容の大幅改編にむけて

音楽科・岸 啓子

1. 授業概要

芸術文化課程音楽文化コース・造形芸術コース学生が受講する課程共通科目である。授業の目的は時代や社会の中に現れる音楽文化の諸相を理解し、民族・地域・社会・経済・技術等との関連の中で音楽文化の意味と役割を吟味する事である。授業の具体的内容は、20世紀に生まれ、最盛期を迎え、やがて解体したロックを例に、音楽の特徴と社会的・経済的・政治的なもの関連を、時代の中で読み解くことである。しかしこの内容は今年で打ち止めとする。講義を始めた数年前はインディーズ全盛期で、ロックは若者の音楽文化であったが、今やジャンルとして消滅寸前である一方、すべての音楽にロック的要素が浸透し、ロックを語る共通基盤が失われてしまった。その間、デジタル化・音楽聴取の個人化で音楽産業は大躍進を遂げたと思う間もなく凋落して不況業種となり、初音ミクがキャラクター認定されて人気アイドル化し、フェミニズムによる音楽の読み直し、脳科学による音楽の作用の解明等、音楽文化はめまぐるしく、雑多に展開した。文化相対主義は西洋芸術音楽を「永遠」とする「芸術の神話」を崩壊させた。この状況下、内容を如何に現代化するかが、自分にとっての喫緊の課題である。

そんなわけで今年度は『ロックミュージックの社会学』を教科書とする最終年度の授業となった。しかし『ロック』が提示したわくわくするような音楽文化的パラダイムシフトを明示する教科書はまだ見いだせず、24年度は主教科書なしの航海となってしまう。

2. 授業評価法

質問紙による5段階評価法による。5段階
 5強く思う ～ 1強く思わない
 問4 教科書は役に立ったか
 問11 この授業は今後に有意義か
 問12 個別発表に興味を持てたか
 それ以外の質問は音楽史と同じであるので省略する。

3. 授業評価結果

回答者数
 芸文2年 20名 それ以外2年1名

シラバスを読んだ14、読んでいない6

問	5	4	3	2	1
1	3	7	10	1	0
2	9	5	5	1	1
3	3	8	8	3	1
4	4	14	3	0	0
5	4	12	6	2	1
6	6	11	3	1	0
7	8	9	2	1	1
8	7	10	3	1	0
9	2	9	8	5	1
10	5	8	7	1	0
11	8	11	1	1	0
12	19	2	0	0	1
14	3	8	6	4	0

3. 結果と考察

音楽文化論は授業目的の解りやすさ評価が他の授業例えば音楽史より常に低く出る。昨年改善したが、今年は悪化し3：8名、2：3名となった。反省点である。レベルはバラツキがでてしまった。出席は良好であるが（5と4：14名）、それが意欲的取り組みにつながられていない（5と4：10名）。学生の発表は工夫されており、興味も持てたようだ（全員5と4評価）。授業の意義（問11：5と4評価19名）を認めている学生がかなりいるので、内容を改めて、より伝わる授業をしたい。自由記述では、美術と一緒にできたのが良かった、という内容が例年より多かった。

4. まとめ

音楽文化論の内容がやっと自分なりにまとまってきたと感じられた矢先に、内容の陳腐化に襲われてしまった。クラシックは10年で内容を入れ替える必要に迫られることはない。授業方法やどのように授業するかも大事だが、授業内容・教材を最適に更新することもそれに劣らず重要である。ただ、次に内容をどう更新するかという教員の迷いを目的が明確でないとした授業評価は反映していると思われる。内容を精選して授業に臨み、24年度もおなじ質問で評価を行ってみたいと考えている。